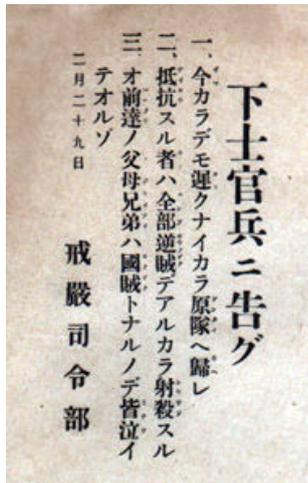


## (7) 2.26 事件の衝撃

加藤が第一中学校を卒業する一カ月ほど前の 1936（昭和 11）年 2 月 26 日に、いわゆる「2.26 事件」が起きた。皇道派青年将校たちが、統制派軍人や対米協調路線を採る政治家を襲った事件である。2.26 事件は、加藤の政治に対する態度を決定づけるほどの大事件だった。

皇道派の指導者である真崎甚三郎や荒木貞夫はクーデタを支持し、陸軍大臣の告示もクーデタを容認するものであった。ところが、昭和天皇の「占拠部隊」の撤収命令が下ると、事態は一変する。統制派の力が強い陸軍首脳部もクーデタ部隊を「反乱部隊」として、これを鎮圧する方向に転換した（写真：戒嚴司令部が出した布告）。



反乱を起こしたクーデタ部隊は「国賊」とされ、一挙に瓦解してゆく。この一連の経過を見て、加藤は政治というものの恐ろしさを知る。

もともと大言壮語を嫌い、徒党を組んで行動することができなかった加藤は、2.26 事件によって、「政治」を好まない、という態度がつくられたともいえるだろう。しかし、同時に、「政治」はこ

ちらから近づかなければ、向うから迫って来る何ものかである」という認識をもった。このふたつの認識のあいだにあって、たえず政治といかなる態度で向き合っただけを考えた。それは安保闘争のときにも、九条の会のときにも、加藤は考え続けたうえで、みずからの態度を決めているのである。